

津

端

亭

編

纂

現代短歌分類辭典

新裝判

9卷

津
端
亨
編纂

現代短歌分類辭典

新裝判
9 卷

現代短歌分類辞典

新装版 9 卷

通巻 1 6 7

昭和六十三年八月二十二日発行 定価一五、〇〇〇円

著者発行
兼印刷者

津 端 亨

発行所

現代短歌分類辞典刊行所

代表 津 端 亨

〒345 埼玉県北葛飾郡杉戸町宮前一九六一五

電話 (〇四八〇) 三八一〇〇四〇番

振替 東京三一九三二一四

	歌数	頁数		歌数	頁数		歌数	頁数
こだます	六	一	こつぱ(骨箱)	二	九	ことう(古塔)	三	二
こだませーし〔符せし〕	一	一	こつぶ(コップ)	二五	九	ことう(孤島)	二	二
こだませーる〔符せる〕	三	一	こつぶ(小粒)	三	九	ことう(孤燈)	二	二
こだわらーず〔こだはらず〕	七	一	こつぶうめ〔小粒梅〕	二	九	ことう(鼓動)	三	二
こだわらーぬ〔こだはらぬ〕	五	一	こつぺばん〔コッペパン〕	七	九			
こだわる〔こだはる〕	三	一	こつぺりや〔コッペリヤ〕	一	九			
こち〔此方〕	三	二	こつぺん〔骨片〕	七	九			
こち〔東風〕	四	二	こつば(小壺)	四	九			
こーち〔コーチ〕	一	三	こつば(小棲)	二	二〇			
こちこち	四	三	こづめ(小爪)	一	二〇			
こちこち〔此方此方〕	三	三	こづる(小鶴)	一	二〇			
こちだ〔近田〕	三	三	こづれきぎす〔子連れきぎす〕	四	二〇			
こちたかる	四	三	こてい〔固定〕	九	二〇			
こちたき	二	四	こてい〔湖底〕	二	二〇			
こちたく〔言痛・事痛〕	一五	四	こてき(小突く)	一	二〇			
こちたき〔言痛〕	二	四	こづく(小机)	二	二〇			
こちたし〔言痛・事痛〕	六	四	こづくえ(滑稽)	二	二〇			
こちただ	一	四	こつこつ	二	二〇			
こちたーみ	二	四	こつこつと	一	二〇			
こちどり〔小千鳥〕	二	四	こつぜん〔忽然〕	二	二〇			
こちなげに〔骨無げに〕	一	四	こつぜんと〔忽然と〕	一	二〇			
こちよう〔誇張〕	一四	五	こつぜんとして〔忽然として〕	二	二〇			
こちよう〔小蝶・こてふ〕	一	五	こつそ(こつさう・骨相)	一	二〇			
こちようすみれ〔胡蝶董〕	五	五	こつそ(こつさう・骨相)	一	二〇			
こちようはな〔胡蝶草・胡蝶花・こてふ花〕	五	六	こつそり	一	二〇			
こちようらん〔胡蝶蘭・こてふらん〕	四	六	こつたう〔こずたふ・木伝ふ〕	二	二〇			
こちら〔此方〕	一六	六	こつちよう〔こつちやう・骨頂〕	二	二〇			
こちらむき	二	八	こつちよう	二	二〇			
こちんまりとして	一	八	こつちよう	二	二〇			
こつ〔骨〕	四	八	こつちよう	二	二〇			
こつあげ〔骨上げ〕	二	八	こつちよう	二	二〇			
こつか〔こくか・国家〕	二	八	こつちよう	二	二〇			
こつか〔こくか・国歌〕	二	八	こつちよう	二	二〇			
こつかい〔こくくわい・国会〕	九	八	こつちよう	二	二〇			

ことづき〔古陶器〕	三	元	ことづめ〔琴爪〕	二	三	ことほぎ〔寿ぎ〕	三	元
ことづぐ〔古道具〕	一	元	ことと〔事と〕	一	三	ことほぎ―て〔寿ぎて〕	三	元
ことかかぬ〔事欠かぬ〕	六	元	こととと〔事と〕	一六	三	ことほぐ〔寿ぐ・言祝ぐ〕	三	元
ことかく〔事欠く〕	三	元	こととう〔こととふ・言問う・事問う〕	七	三	ことむく〔言向く〕	二	元
ことがら〔事柄〕	一	元	こと―とて	四	三	ことむけ〔言向け〕	六	元
こときれし〔事切れし〕	一〇	元	ことども〔事ども〕	三	三	ことむづかしい〔言難しい〕	二	元
ことく〔孤独〕	三三	元	こととわぬ〔言問はぬ・言問わぬ〕	四	三	ことども〔子供〕	四	元
ことくかん〔孤独感〕	一〇	元	こととわぬ〔言問はぬ・言問わぬ〕	二	三	ことどもころ〔子供心〕	五	元
ことぐさ〔異草〕	九	元	ことととわぬ〔言問わぬ〕	七	三	ことどもたち〔子供達〕	二六	元
ことぐに〔異国〕	七〇	元	こと―なけれ〔事なけれ〕	四	三	こともなげに	二六	元
ことくめん〔胡徳面〕	一	元	ことなき〔事無き〕	一三	七	ことどもふく〔子供服〕	一	元
ことごと〔悉・尽〕	一四	元	ことなげに〔事なげに〕	二五	三	ことどもべや〔子供部屋〕	一	元
ことごとく〔悉く・尽く〕	四八	元	ことならぬ〔異らず〕	三	三	ことどもら〔子供等〕	四	元
ことごと	二	元	ことならぬ〔異らぬ〕	三	三	ことどもらしい〔子供らしい〕	一	元
ことごと〔悉に・尽に〕	八	元	ことなり〔異なり〕	九	三	ことどもらしい〔子供らしい〕	一	元
ことごと〔事に〕	三	元	ことなり―て〔異なりて〕	二四	三	ことよう〔ことやう・異様〕	二	元
ことごと―は	一	元	ことなる〔異なる〕	二	三	ことり〔小鳥〕	七	元
ことこまやかに〔事細やかに〕	一	元	ことなれり〔異れり〕	六	三	ことりかこ〔小鳥籠・小鳥籠〕	七	元
ことさら〔殊更〕	一	元	ことなれり〔異れる〕	二六	三	ことりことり〔コトリコトリ〕	一	元
ことさらに〔殊更に〕	四	元	ことに〔殊に〕	一六	三	ことりことりと	一	元
ことさらに〔殊更に〕	九六	元	ことに―はし―つれ〔異にはしつれ〕	一	三	ことりども〔小鳥ども〕	一	元
ことさらにめきし〔殊更めきし〕	二	元	ことのは〔言の葉〕	一六	三	ことりや〔小鳥屋〕	一	元
ことし〔今年〕	九八	元	こと―の―はか〔殊の他・殊の外〕	八	三	ことりら〔小鳥等〕	一	元
ことしかぎり〔今年限り〕	二	元	ことば〔言葉〕	一六四	三	ことわけ〔事分け〕	一	元
ことしげし〔事繁し〕	二	元	ことばがき〔言葉書〕	三	三	ことわざ〔諺〕	一	元
ことしこほろぎ〔今年こほろぎ〕	二	元	ことはじめ〔事始め〕	六	三	ことわり〔ことわり・理・断り〕	一	元
ことしすゑ〔今年末〕	一	元	ことばじり〔ことばぢり・言葉尻〕	一	三	ことわり―て〔断りて〕	一	元
ことしだけ〔今年竹〕	一六	元	ことばすくな〔言葉少な〕	一	三	ことわる〔断る〕	一	元
ことしただけ〔今年竹葉〕	一	元	ことばすくなき〔言葉少なき〕	三	三	ことな〔小菜〕	二	元
ことしふ〔今年生〕	六	元	ことばすくな〔言葉少な〕	六	三	ことな〔粉〕	二	元
ことしめ〔今年芽〕	三	元	ことばすくな〔言葉少な〕	一〇	三	ことおしろい〔粉白粉〕	一	元
ことしわかだけ〔今年若竹〕	一	元	ことばすくな〔言葉少な〕	三	三	ことながれ〔小流れ〕	三	元
ことすくなびと〔此言少人〕	一	元	ことばたくみに〔言葉巧みに〕	一	三	ことなかわ〔汾河〕	七	元
ことだく〔許多〕	二七	元	ことばづかい〔ことばづかひ・言葉遣い〕	一	三	ことなぎ〔小菜葱〕	三	元
ことだま〔言葉〕	三六	元	ことばなまり〔言葉訛〕	四	三	ことなぎ〔小風ぎ〕	一	元
ことたる〔事足る〕	七	元	ことばみじか〔言葉短か〕	一	三	ことなぐすり〔粉菜〕	一	元
ことち〔琴柱〕	八	元	ことひと	二	三	ことなぐに〔来なくに〕	一	元
ことづくる〔言伝くる〕	一	元	ことひら―の―やま〔琴平の山〕	二	三	ことなし〔粉々〕	一	元
ことづけて〔言づけて〕	三	元	ことぶき〔寿・壽〕	二五	三	ことなし〔熟し〕	一	元
ことづて〔言伝て〕	九	元	ことぶれ〔事觸れ〕	二七	三	ことなし〔小梨〕	一	元

こなしよく〔粉食〕	二	一五	このあと〔この後・此の後〕	一九	三三	このはら〔木の葉ら〕	三	二五
こなす〔熟す〕	三	一五	このうえ〔この上・此の上〕	二	三三	このーひ〔此の日〕	二八	二五
こなずみ〔粉炭〕	三	一五	このうち〔此内・此中〕	一八	三三	このーひごろ〔此の日頃〕	三九	二六
こなた〔此方〕	一三	一五	このえ〔近衛〕	一	三三	このほど〔此程・此の程〕	三	二六
こなたおもて〔此方面〕	一	一五	このえふみまろ〔近衛文麿〕	一四	三三	このぼり〔小織〕	一	二六
こなたかなた〔かなた・こなた・此方彼方〕	一	一五	このかげ〔木の蔭〕	三三	三三	このま〔木間・きのま〕	五九	二六
こなたち〔粉立ち〕	一	一五	このかた〔此方〕	三	三三	このまえ〔此前〕	二	二七
こなたばこ〔粉煙草・粉良〕	二	一五	このかみ	二	三三	このまがくりて	三	二七
こーなば〔来なば〕	一	一五	このかん〔此間〕	三	三三	このまがくれ〔木の間隠れ〕	二	二七
こなばん〔粉パン〕	一五	一五	このくれ〔木の暮〕	一四	三三	このまごし〔木の間越し〕	一	二七
こなひき〔粉挽〕	三	一五	このくれやみ〔木の暮れ闇〕	二	三三	このましき〔好ましき〕	五	二七
こなひきごや〔粉引小屋〕	一	一五	このごろ〔此頃〕	六	三三	このまーず〔好まず〕	一五	二七
こなひきろば〔粉碾驢馬〕	一	一五	このさき〔此先〕	二	三三	このまま〔此の儘〕	二	二七
こなべ〔小鍋〕	九	一五	このした〔木の下〕	二〇	三四	このまみち〔木の間道〕	五	二七
こなみじん〔粉微塵〕	一	一五	このしたいしみち〔木下石道〕	一	三七	このみ〔好み〕	三六	二七
こなゆき〔粉雪〕	二六	一五	このしたぐれ〔木下枝〕	一	三七	このみき〔木の幹〕	三	二七
こなら〔小櫓〕	二六	一五	このしたかくり〔木下隠〕	一	三七	このみーし〔好みし〕	三	二七
こならやま〔小櫓山〕	二	一五	このしたかけ〔木下陰・木下蔭〕	二四	三七	このみーて〔好みて〕	二	二七
こなれ〔来なれ〕	二五	一五	このしたぐれ〔木下暗〕	四	三七	このむ〔好む〕	一七	二七
こなわ〔小縄〕	二	一五	このしたしずく〔木の下雪〕	一	三七	このめ〔木の芽・きのめ〕	一八	二七
こなん〔湖南〕	八	一五	このしたつゆ〔木下露〕	三	三七	このめあらし〔木の芽あらし〕	一	二八
こにかい〔小二階〕	一	一五	このしたみず〔木下水〕	一	三七	このめだち〔木の芽立ち〕	一	二八
こにもつ〔小荷物〕	一	一五	このしたみち〔木下道〕	三	三七	このめだつ〔木の芽立つ〕	三	二八
こにわ〔小庭〕	一	一五	このしたやみ〔木下闇〕	二六	三七	このめどき〔木の芽時〕	二〇	二八
こにんずう〔小人数〕	七	一五	このたび〔この度・此度〕	五	三七	このめふく〔木の芽吹く〕	二	二八
こーぬ〔来ぬ〕	一	一五	このつき〔この月・此月〕	七	三七	このめーり〔好めり〕	六	二八
こぬかあめ〔小糠雨〕	一七〇	一五	このところ〔此所〕	一三	三七	このめーる〔好める〕	五	二八
こぬかほし〔小糠星〕	八	一五	このーとし〔此年〕	七	三七	このめーる〔好める〕	二	二八
こぬれ〔木末〕	二	一五	このね〔木の根・きのね〕	一三	三七	このもかのも〔此面彼面〕	二	二八
こね〔木根〕	二七	一五	こののち〔此後〕	九	三七	このもししい〔好もしい〕	二	二八
こーね〔来ね〕	二五	一五	このは〔木の葉・きのほ〕	六	三七	このもしき〔好もしい〕	一	二八
こねかえす〔こねかへす・捏ね返す〕	二四	一五	このはかけ〔木の葉蔭〕	五九	三七	このもと〔木の下・きの下〕	一四	二八
こねこ〔子猫〕	二	一五	このはがた〔木の葉形〕	一	三七	このよ〔此世〕	一四	二八
こねこら〔子猫等〕	三七	一五	このはだ〔木の肌・きのほだ〕	一	三七	このよう〔此様〕	一	二八
こねさぶ〔木根さぶ〕	二	一五	このはづく〔木葉木莧〕	一四	三七	このーよごろ〔此の夜頃〕	一	二八
こねずみ〔小鼠・子鼠〕	一	一五	このはな〔木の花〕	三	三七	このんで〔好んで〕	一	二八
こねる〔捏ねる〕	一〇	一五	このはな〔木の花〕	二六	三七	こーは〔此者〕	一	二八
この〔此の・斯の〕	五	一五	このはなあかり〔木の花明り〕	三	三七	こはうちよう〔こほうじよう・古方丈〕	八	二八
このあいだ〔此間〕	五三	一五	このはびな〔木の葉雛〕	一	三七	こはかつた〔恐かつた・怖かつた〕	一	二八
	三三	一五	このはまじり	一	三七	こはかはら〔小墓原〕	一	二八
	五	一五	このはもみじ〔木の葉紅葉〕	一	三七		一	二八

こはき〔硬き・こわき・強き〕	四	二九六	こはるび〔小春日〕	七	三〇七	こぶすま〔小襖〕	六	三〇八
こはく〔硬く・こわく・強く〕	一	二九六	こはるびより〔小春日和〕	四	三〇八	こふだ〔小札〕	二	三〇八
こはぎ〔小萩〕	二	二九六	こはん〔湖畔〕	四	三〇八	こぶた〔子豚〕	二	三〇八
こはく〔琥珀〕	七	二九七	こはんどうろ〔湖畔道路〕	一	三〇九	こぶだつ〔瘤だつ〕	一	三〇八
こはくいろ〔琥珀色〕	二〇	二九七	こはんとき〔小半時〕	九	三〇九	こぶだて〔瘤だて〕	一	三〇八
こはくとう〔琥珀糖・こはくたう〕	一	二九八	こはんにち〔小半日〕	四	三〇九	こぶだらけ〔瘤だらけ〕	二	三〇八
こばこ〔小箱〕	七	二九八	こはんもの〔古版物〕	一	三〇〇	こぶだらけなる〔瘤だらけなる〕	一	三〇八
こはごはに〔恐々に・こわごわに〕	三	二九八	こび〔媚び〕	九	三〇〇	こぶつや〔古物屋〕	三	三〇八
こはさ―ず〔こわさず〕	一	二九八	こびー〔コピ―〕	一	三〇一	こぶとり〔小太り・小肥り〕	一	三〇八
こはさ―れ―やすく〔こわされやすく〕	一	二九八	こひえ〔小比叡〕	三	三〇一	こぶな〔小鮒〕	二	三〇八
こはし〔小橋〕	三	二九八	こひき〔木挽〕	二	三〇一	こぶね〔小舟・小船〕	三	三〇八
こはしみず〔荒清水〕	一	二九八	こひきだし〔小抽斗〕	一	三〇一	こぶまき〔昆布巻・こんぶ巻〕	二	三〇八
こは―しむ〔恋はしむ〕	二	二九八	こびざし〔小廂〕	二	三〇一	こぶら〔コブラ〕	一	三〇八
こは―しめ〔恋はしめ〕	一	二九八	こひつじ〔小羊〕	二	三〇一	こぶり〔小降り〕	七	三〇三
こばしり〔小走〕	七	二九八	こび―つ―つ〔媚びつ―つ〕	四	三〇二	こぶる〔小風呂〕	一	三〇三
こばしりに〔小走りに〕	六	二九八	こびなた〔小日向〕	三	三〇二	こぶん〔古墳〕	一	三〇三
こばしる〔小走る〕	五	二九八	こび―ぬ〔媚びぬ〕	一	三〇二	こぶん〔古文〕	三	三〇三
こはだ〔木膚・木肌〕	四	二九八	こひばり〔子雲雀〕	三	三〇二	こぶんか〔古文化〕	一	三〇三
こばた〔小旗〕	三	二九八	こびよう〔古廟〕	一	三〇二	こぶんけん〔古文獻〕	一	三〇三
こばたの―さと〔木幡の里〕	一	二九八	こびようぶ〔小屏風〕	二	三〇二	こぶんしょ〔古文書〕	一	三〇三
こばち〔小鉢〕	三	二九八	こびりつゐてる〔こびり付いてる〕	一	三〇二	こぶんじん〔古文人〕	一	三〇三
こばち〔小蜂〕	一	二九八	こびりつく〔こびり付く〕	四	三〇二	こべに〔濃紅〕	五	三〇四
こばと〔小鳩〕	二	二九八	こびる〔媚びる〕	二	三〇二	こへび〔小蛇〕	三	三〇四
こばな〔小花〕	六	二九八	こひん〔孤貧〕	一	三〇二	こべや〔小部屋〕	九	三〇四
こばな〔小鼻〕	八	二九八	こふ〔恋ふ〕	一〇	三〇二	こべり〔湖縁〕	二	三〇四
こばなし〔小咄・小話〕	二	二九八	こふ〔乞ふ〕	六	三〇二	こへん〔湖辺〕	九	三〇四
こばな―の―むら〔小塙の村〕	一	二九八	こぶ〔瘤〕	五	三〇二	こほう〔孤峰・孤峯〕	二	三〇四
こはば〔小幅〕	一	二九八	こぶ〔媚ぶ〕	二	三〇二	こほうし〔小法師〕	九	三〇四
こはま〔小浜〕	一四	二九八	こぶ〔昆布・こんぶ〕	三	三〇二	こほく〔湖北〕	三	三〇四
こばま―ざる〔拒まざる〕	二	二九八	こふうな〔古風な〕	二	三〇二	こぼく〔古木〕	三	三〇四
こばま―ず〔拒まらず〕	三	二九八	こふうなる〔古風なる〕	五	三〇二	こぼくな〔古朴な〕	二	三〇四
こばみ―ぬ〔拒みぬ〕	二	二九八	こぶかき〔木深き〕	三	三〇二	こぼこほ〔木履〕	二	三〇四
こばむ〔拒む〕	四	二九八	こぶかく〔木深く〕	七	三〇二	こぼこぼと	八	三〇四
こはめし〔強飯・こわめし〕	一	二九八	こぶかし〔木深し〕	一	三〇二	こばさ―ず〔零さず〕	四	三〇四
こばめ―り〔拒めり〕	一	二九八	こぶかみ〔木深み〕	二	三〇二	こばし〔恋ほし〕	三	三〇四
こばめ―る〔拒める〕	八	二九八	こふく〔古服〕	二	三〇二	こばしおり	七	三〇四
こばら〔木原〕	二〇〇	二九八	こふく〔鼓腹〕	二	三〇二	こほしかる〔恋ほしかる〕	四	三〇四
こはる〔小春〕	三	二九八	こぶし〔古武士〕	二	三〇二	こほしき〔恋ほしき〕	一	三〇四
こはると〔コバルト〕	九	二九八	こぶし〔辛夷〕	二	三〇二			
こはるといろ〔コバルト色〕	二	二九八	こぶし〔拳〕	二	三〇二			

こほしく(恋ほしく)	五	三九	こぼれ—ざる(零れざる)	一	五四	こまがた(駒形)	三	三七五
こほしけれ(恋ほしけれ)	四	三〇	こぼれ—し(零れし)	一	五四	こまがたけ(駒ヶ岳・駒ヶ嶽)	七	三七五
こほしき(恋ほしき)	三	三〇	こぼれそめ—たる(零れ染めたる)	四	三五	こまがたばし(駒形橋)	一	三七六
こほし—たり(零したり)	二	三〇	こぼれそめ—つ(零れ染めつ)	一	三五	こまかな(細かな)	一	三七六
こほし—つ(零しつ)	一	三一	こぼれだね(零れ種)	五	三五	こまかなり(細かなり)	二	三七六
こほしつぐ	二	三一	こぼれ—たり(零れたり)	五	三五	こまかなる(細かなる)	二	三七六
こほし—つつ(零しつつ)	七	三一	こぼれ—たる(零れたる)	六	三五	こまかに(細かに)	二	三七七
こほし—て(零して)	四九	三二	こぼれちる(零れちる)	四	三五	こまがね(駒ヶ根)	七	三七七
こほし—ながら	一	三二	こぼれ—つ(零れつ)	六	三五	こまがみね(駒ヶ嶺)	二	三七九
こほし—ぬ(零しぬ)	一五	三三	こぼれつぐ(零れつぐ)	三	三五	こまがたけ(駒ヶ岳・駒ヶ嶽)	六	三七九
こほし—み(恋ほしみ)	四	三三	こぼれ—つつ(零れつつ)	哭	三五	こまかむし(細か虫)	一	三七九
こほし—み—て(恋しみて)	一五	三三	こぼれ—て(零れて)	三	三五	こまがら(駒雀)	一	三七九
こほしむ(恋ほしむ)	四	三四	こぼれてる(零れてる)	一	三六	こまがらす(高麗鴉)	一	三七九
こほし—も(恋し—も)	六五	三四	こぼれ—ぬ(零れぬ)	三	三六	こまがわ(高麗川)	三	三七九
こほす(零す)	二五	三五	こぼれば(こぼれ葉)	三	三六	こまき(小牧)	六	三七九
こほせ—し(零せし)	四	三六	こぼればぎ(こぼれ萩)	二	三六	こまきやま(小牧山)	二	三七九
こほせ—る(零せる)	一四	三九	こぼればなし(零れ話・こぼれ話)	一	三六	こまぎれ(小間切・細切)	二	三七九
こぼた—れ—し(毀たれし)	一〇	三九	こぼれび(こぼれ陽)	一	三六	こまく(鼓膜)	七	三七九
こぼた—れ—て(毀たれて)	九	四〇	こぼれまづ(零松葉)	二	三六	こまくら(小枕)	七	三七九
こぼち—て(毀ちて)	二	四〇	こぼれみ(零実)	二	三六	こまげた(駒下駄)	二	三七九
こぼつ(壊つ・毀つ)	九	四〇	こぼれみず(零水)	二	三六	こまこう(細かう・細こう)	二	三七九
こぼとけ(小仏)	四	四〇	こぼれ—む(零れむ)	一	三六	こまこま(細々)	二	三七九
こぼりえんしゅう(小堀遠州)	七	四〇	こぼれやすし—も(零れやすし—も)	一	三六	こまこま(細々)	二	三七九
こぼる(零る)	三	四一	こぼれやすし—ず(零れやまず)	一	三六	こまざら(高麗桜)	一	三七九
こぼる—なり(零るなり)	三九	四一	こぼれゆ(こぼれ湯)	六	三六	こまざら(高麗皿)	一	三七九
こぼる—ばかり(零るばかり)	二	四二	こぼれる(零れる)	五	三六	こまじ(高麗路)	一	三七九
こぼれ(零れ)	三三	四二	こぼれ—ん(零れん)	一〇	三六	こましば(高麗芝)	三	三七九
こぼれあい—たる(零れあひたる)	二	四三	こぼん(古本)	一	三六	こまち(小町)	三	三七九
こぼれいる(零れいる)	三	四三	こぼん(小本)	一	三六	こまちぎくら(小町桜)	三	三七九
こぼれおちくる(零れおちくる)	三	四三	こま(駒)	一	三七	こまちそら(小町草)	一	三七九
こぼれおち—た(零れ落ちた)	一	四三	こま(将駒)	二	三七	こまちひめ(小町姫)	一	三七九
こぼれおち—て(零れ落ちて)	一	四三	こま(高麗)	六	三七	こまつ(小松)	一	三七九
こぼれおちる(零れ落ちる)	一	四三	こま(独樂)	五	三七	こまつがくれ(小松隠れ)	三	三七九
こぼれおつ(零れ落つ)	一六	四三	こまいぬ(高麗犬)	四	三七	こまつがはら(小松が原・小松ヶ原)	三	三七九
こぼれおつる(零れ落つる)	五	四三	こまおう(高麗王)	一	三七	こまつがわ(小松川)	三	三七九
こぼれがらす(こぼれ鳥)	一	四三	こまかき(細かき)	一五	三七	こまつこい(細っこい)	一	三七九
こぼれくる(零れくる)	三〇	四四	こまかく(細かく)	九	三七	こまつしま(小松島)	一	三七九
こぼれさく(零れ咲く)	一四	四四	こまかさ(細かさ)	六	三七	こまつな(小松菜)	一	三七九
こぼれさす(零れさす)	一	四四	こまかし(細かし)	五	三七			

こまつなえ〔小松苗〕	二	三九	こみどり〔濃緑〕	五九	四〇四	こもごも〔交々〕	九	四〇
こまつばやし〔小松林〕	二三	三九〇	こみねーのーはら〔小峰の原〕	一	四〇五	こもごもに〔交々に〕	三	四〇
こまつばら〔小松原〕	三三	三九〇	こむ〔込む〕	一六四	四〇五	こもち〔子持ち〕	六	四〇三
こまつまじり〔小松まじり〕	一	三九一	こーむ〔来む〕	四七	四〇八	こもちいぬ〔仔持犬〕	一	四〇三
こまつむら〔小松叢〕	一	三九一	こむ〔きよむ・虚無〕	三	四一五	こもちーのーやま〔子持の山〕	一	四〇三
こまつやま〔小松山〕	二	三九一	こむかん〔虚無感〕	四	四一五	こもの〔小者〕	三	四〇三
こまでら〔高麗寺〕	一	三九一	こむぎ〔小麦・小麦〕	元	四一五	こもの〔小物〕	一	四〇三
こまど〔小窓〕	五	三九一	こむぎいろ〔小麦色・小麦色〕	二	四一六	こもらいいて〔籠らひて〕	二	四〇三
こまども〔駒ども〕	一	三九二	こむぎこ〔小麦粉・小麦粉〕	五	四一六	こもらう〔籠らふ・籠らう〕	一七五	四〇三
こまどり〔駒鳥〕	三	三九二	こむぎばたけ〔小麦畑〕	四	四一六	こもらす〔籠らす〕	一八	四〇六
こまぬく〔拱く〕	二	三九三	こむくどり	一	四一六	こもらーず〔籠らず〕	三	四〇六
こまの〔高麗野〕	二	三九三	こむし〔小蟲〕	一	四一六	こもらせ〔籠らせ〕	四	四〇六
こまばこうてい〔駒場校庭〕	一	三九三	こむしゆぎ〔虚無主義〕	二	四一六	こもらせーて〔籠らせて〕	四	四〇六
こまびと〔高麗人〕	一〇	三九三	こむすめ〔小娘〕	元	四一六	こもらーむ〔籠らむ〕	二	四〇六
こままる〔高麗丸〕	一	三九三	こむそう〔虚無僧〕	三	四一七	こもり〔籠り・籠り〕	三	四〇七
こまものしょう〔小間物商〕	一	三九三	こむとう〔虚無党〕	一	四一七	こもりいいて〔籠りゐて〕	七	四〇五
こまものてん〔小間物店〕	一	三九三	こむら〔小村〕	二七	四一八	こもりうた〔子守歌・子守唄〕	六	四〇五
こまものや〔小間物屋〕	一	三九三	こむら〔木叢・木群〕	八	四一八	こもりおり〔籠りおり〕	一	四〇五
こまやか〔細やか〕	二	三九三	こむらさき〔濃紫〕	一	四一八	こもりおんな〔子守女〕	二	四〇五
こまやかさ〔細やかさ〕	七	三九三	こむらさきゆうじょ〔小紫遊女〕	一	四一八	こもりくの〔隠・隠所〕	九	四〇五
こまやかに〔細やかに〕	一〇三	三九三	こむる〔籠むる〕	一四	四一八	こもりくらしいて〔籠り暮して〕	二	四〇五
こまやけく〔細やけく〕	四	三九五	こめ〔米〕	八三	四二〇	こもりーし〔籠りし〕	五	四〇五
こまりゐる〔困りゐる〕	一	三九五	こめうり〔米売〕	九	四二〇	こもりすむ〔籠り住む〕	八	四〇五
こまる〔困る〕	一七	三九五	こめかみ〔頼頼〕	三	四二〇	こもりーたる〔籠りたる〕	四	四〇五
こまるた〔小丸太〕	一	三九五	こめーし〔込めし〕	二	四二〇	こもりーつ〔籠りつ〕	一	四〇五
こみ〔込み〕	二五	三九五	こめーたり〔込めたり〕	七	四二〇	こもりつぐ〔籠りつぐ〕	一	四〇五
こみ〔混み〕	三	三九六	こめーたる〔込めたる〕	二七	四二〇	こもりなく〔こもり鳴く〕	一	四〇五
こみあう〔込み合ふ〕	三	三九六	こめたわら〔米俵〕	一	四二〇	こもりぬ〔隠り沼〕	一	四〇五
こみあえーり〔込みあえり〕	二	三九六	こめつき〔米搗き〕	二	四二〇	こもります〔籠ります〕	一	四〇五
こみあえーる〔込みあえる〕	二	三九六	こめつきむし〔米搗虫〕	一	四二〇	こもりみ〔隠り身〕	一	四〇五
こみあぐ〔込み上ぐ〕	二	三九六	こめつぷ〔米粒〕	八	四二〇	こもりむすめ〔子守娘〕	一	四〇五
こみあぐる〔込みあぐる〕	二	三九六	こめーて〔込めて〕	一	四二〇	こもる〔籠る・籠る・隠る〕	一	四〇五
こみあげーて〔込みあげて〕	二七	三九六	こめときみず〔米とき水〕	一	四二〇	こもるーらむ〔籠ららむ〕	一	四〇五
こみあげる〔込みあげる〕	二	三九六	こめびつ〔米櫃〕	一	四二〇	こもれ〔木洩れ〕	一	四〇五
こみさき〔小岬〕	一	三九六	こめぶくろ〔米袋〕	二	四二〇			
こみず〔小水〕	一	三九六	こめや〔米屋〕	五	四二〇			
こみずねぎ〔小水葱〕	一	三九六	こめる〔混める〕	一	四二〇			
こみせ〔小店〕	一	三九六	こめる〔込める〕	八	四二〇			
こみぞ〔小溝〕	一	三九六	こめる〔込める・籠める・籠める〕	一六	四二〇			
こみち〔小路〕	一八	三九六	こめん〔湖面〕	一六	四二〇			
			こも〔菰〕	一六	四二〇			

こもれび〔木洩日〕	三
こもれり〔簾れり〕	二二
こもれり〔簾れる〕	二五
こもろ〔小諸〕	一五
こもんじ〔古文字〕	四六
こもんじよ〔古文書〕	四九
こや〔小屋〕	四九
合計	三〇、五八二首

こだまする【動詞】

前巻の目次に続く。

夜半のから雷鳴、家中の硝子戸を震はして野空を高くこだまする⑬
わが下る谿におちつぐ雪のひびきあるはかそけくこだまするかも⑨
わが船にこだまするまで汽笛の音は近かれど霧にわかずその船④
わびしらに老木の胴を丁と打つ丁と打つ山こだまする⑤
われにちかづきやがて去りゆく犬一匹山にあらしのこだまする中①
吾を呼ぶ人間のこえとほりきて地面の雪にこだまするかも⑦

こだませし【動詞・助動詞】〔弔せし〕

惜別と讃歎は谷にこだませし大師入定のあけてもくれても②

こだませる【動詞・助動詞】〔弔せる〕

朝明けて港の音のこだませる春のふるさとの山を聴きをり
さみしくも秋の河原にこだませる石を切るなり四五の人たち⑤
石灰の山の爆破はこだませる谿深けれどこの日暑しも⑤

こだわらず【動詞・助動詞】〔こだはらず〕

おのづから浮ぶまゝ人を人に向け今日我が心こだはらずあり⑨
かなしみにわらべのこころこだはらず焼けあとひろし行きて遊べよ

(新萬葉集四)

悔ゆとはあらねど金にこだはらず来し生をみふ今にして思ふ②

うし

こだはらずわれは生きなむ草の上をへうへうとして早春の風
この水に遊びし日より七年と思ふ感傷にもはやこだはらず②
傷兵の車内募金にこだわらず銭あれば出しなきときは出さず
背を流すこの少年のこだはらずわが瘦肉を声あげて笑ふ

こだわらぬ【動詞・助動詞】〔こだはらぬ〕

幾たびか聞きしこと又母の語りこだはらぬ性となりて老ゆらむ①
いふに足らぬ事となしてはこだはらぬ思ひもたむに齡の慣れぬ
齒孕むらのまだこだはらぬ嫩色に杉生もり来る朝の日さしぬ⑤
放膽に行きてこだはらぬ叔父なりき為事にもはた遊びの上にも①
物言にこだはらぬ老ぞといふ如き顔してゐればならぬ時もあり⑤

こだわる【動詞】〔こだはる〕

〔目四〕 かわる。かわり合う。さしあはさる。ちよつとしたことにとらわれる。

青澄める太刀をしみれば、生き死にに、こだはる心、などかあらめや

①

赤赤と目に沁むバラの色きびしまぶたをふせて何にこだはる②

金子 薫園	山本 武雄	石 樽 千亦	小 杉 放庵	上 代 皓三	前 田 夕暮	中 河 幹子	山 下 陸奥	窪 田 空穂	高 田 浪吉	小 島 美代子	白 井 善司	谷 鼎	金子 不泣	堀 内 通孝	青 木 実	伊 藤 公平	村 田 利明	林 圭 子	岡 田 菁麓	塚 田 菁紀	西 田 嵐翠	福 田 夕咲	矢 部 道氣
-------	-------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	---------	--------	-----	-------	--------	-------	--------	--------	-------	--------	--------	--------	--------	--------

足に絡む猫をすら憎む日のありて胃の位置になほ心こだはる②

ありありて人に告げねど解しがたき論理の部分に寂しくこだはる⑤

(角川文庫)

青澄める太刀をしみれば生き死にに、こだはる心などかあらめや①
息づきておもふほどにはあらざれど一つの事にこだはる日々を⑤
幾日かこだはる校正のすみし朝とほくに光る窓もしたしも③
意識なき君とあひ得し感傷は複雑にして今にこだはる②
一行の附記にこだはる目の前に万年青はあをく鉢にうごかぬ

今たべしは鯛ぞと云はれうなづきぬ忘れてあらむことにこだはる⑦

美しき娘の降りたればこの電車ひたに走れど心こだはる①

うつしみの我に聊かの熱ありてさしひくさまに一日こだはる③

集三

老いさびてこだはる事のあらずあらばわれにも自在神や与へむ⑨
大き軒かくが羨しも悶々とまらざりし会議にこだはる①
幼子の泣くこゑ聞こゆ母を呼ぶそのこゑきけば母にこだはる⑩
大なる画面こそよけれ蘿薔を拵つてこだはることなし①

かぎり無き蜻蛉が出て漂へば病ひあるがに心こだはる②
書けば直に活字に組まるる世にありて文字にこだはる愚かと云はむ

③

風の日の鳴らぬ鼓もすべなくて言足らざりし会ひにこだはる②

肩寄せて辿り讀みぬし少女らはこだはることもなく去りてゆく②

憲法などにこだはる愚者を尻目にし為すべきをなすといふ如き顔⑤

木の実拾ひて孫遊ばせつつ宴会費の二千五百円といふにこだはる⑦

親善と従属の限界を想ひつつ日米会談に日毎こだはる⑧

戦前をゆたかに住みし家の跡にこだはることもいつかうすれつ③

より

戦ひの日に置きて来し鉢の草はかなきものに今もこだはる②

著書の礼書かざるうちに君逝きぬ時を思ひ今もこだはる④

通俗の意味あひつけて末梢にこだはるなかれ君の雑誌は⑦

二千円の会費をいひて行かぬことに決めし消極こだはるし②

はしたなき乏しき寺の経済をなげくにわづかな金錢にこだはる⑤

星の数つぶさに知らば人間のいのちにこだはる思ひ消ぬべし

窓かけの唐草模様よ見るたびにアネモネかダリヤかと思ひこだはる⑤

水断れし水車をふむといふ比喻にこの幾日か友らこだはる①

みちのくの後三年といふ小駅の名にこだはる時し雨あがる空④

田 中 弥太郎

谷 鼎	宮 柊二	福田 夕咲	高 田 浪吉	鹿 兒 島 壽藏	高 橋 希人	細 井 魚袋	松 田 常憲	立 花 馨	小 宮 良太郎	尾 山 篤二郎	荒 木 暢夫	斎 藤 茂吉	岡 山 巖	近 藤 芳美	植 松 寿樹	富 小 路 禎子	大 岡 博	西 田 嵐翠	松 田 常憲	若 林 牧春	谷 鼎	柴 生 田 稔	高 橋 希人	斎 藤 茂吉	中 河 幹子	米 田 雄郎	飯 島 行子	若 山 喜志子	田 中 四郎	田 中 弥太郎
-----	------	-------	--------	----------	--------	--------	--------	-------	---------	---------	--------	--------	-------	--------	--------	----------	-------	--------	--------	--------	-----	---------	--------	--------	--------	--------	--------	---------	--------	---------

ものごとにこだはることの苦しさや時に随ひ世は渡るべし③
酔ひてなほこだはるものをもちたればしひて不逞の座にあらむとす②
夜の空を東より北に移行する爆音にしばしわれはこだはる(白縁)
ライラックの株ひともの根づきしや心こだはる夜にいたるまで①
ワイマルの青き木立のなかにゐて短歌ひとつに暫しこだはる④
我儘もこだはる癖も或るときはゆるしあひてながく交りたりき⑤

こち【代名詞】(此方)

①他称。話し手側の方角を指示す(近称)。い、こちち、こちら。こなたの意
口、自分の家。又、その家に一緒に住む者。②自称。男女共に用い、対等又はや
や上位の相手との話に用いる。私、自分、手前。

伊豆晴れぬ此方相模の山々の殊にあかるう海にうつりぬ①
稲掛のかげに此方向きたれば野砲と思ふ荷車の轆も①④
いやはるか君の抜手に遠ざかり此方のわれをさびしがらすも
岩尾根の裂けて壁立つ此方より彼方の岩へ踏み越えむとす③
顔あげて此方見よ処女亡き吾子に肖し子もやゐむ蔬菜あらふ娘ら①
かがやかに光し散ればいただきの木々の此方に月出づること①②
容よく裸木にとまり此方向く野鳥は鋭き眼つきしてをり①
彼方かと見れば此方の峯に鳴る雷雨凄まじ赤城連山(多磨四)
萱の根に鼠あらはれ小走りを此方見しとふ我も其方見る⑧
気がついて此方向く子の清しき瞳この目ぞこの目わが和田の瞳ぞ①
此方向けと赤の椿や投げてましその彼のひとにわけの椿を②
こちよれば、こちにとをよりなづさひ来、ほのに人香の身をつつむ闇

②

此方向く仔馬は愛し母馬の莎草食む傍ゆ眼をあげてゐて
この汽船の巨き煙突けぶなびき渡島の子らは此方見てあらむ
五分刈りの小坊主となりし子が名をば呼びていくたびも此方むかしむ
しかすがに女は飛びも越えかねてしばし此方の岸を歩めり③
初夏の雲の此方の入海に星のしるしの白き船浮く(トラビスト歌集)
泥沼の枯蘆の此方涉りつつ白さぎの群遠ぞきゆくも①
菜洗ふといそはく少女額あげて此方見むとせず俯向けるまま①
握りつる鉄の大輪をふと放つ利那身はあり此方の岩に①②
野分だつ薄の風に此方向きて子鴉が啼くよ口赤く開けて
浜なすのさける砂丘をとしみか柵によりて馬の皆此方見る
光りつつ此方へ靡く竹群の返さぬひまを吾は視てをり(多磨二)
引堀に手網うちふせことと柵をうつに鴨の此方向き来る⑩
ひたすらと此方たのめて生きにける人死ににけり死にぬ埒もなく⑩

中沢庭柯	横田専一	真鍋美恵子	酒井広治	斎藤茂吉	長谷川銀作
近藤元	與謝野寛	早川玲子	植松大樹	岡本無	尾上柴舟
山田百合子	金子榮吉	北原白秋	伊藤嘉夫	岡本無	積道空
北原白秋	北原白秋	中河幹子	中原綾子	三木羅風	金子信三郎
岡本無	尾上柴舟	北原白秋	石原千亦郎	島内八郎	北原白秋

人混みにまじりて電車降り給ふ先生をはや此方より認む②
一葉のみ此方へしをれし草の葉の昏れのこりある怪しき白さ①(角川文庫)
皆青く石老山の此方なる畑のみ黄なりもろこし立てば(心の遠景)
み冬づく庭の隅よりたまゆらに此方向きし鮎とほれり⑧
三田行より大門行に乗りかふればこちの電車は灯のともりる①
夕茜ひろぐる空に黒き点無数にあらはれ此方に寄り来②⑩

こち【名詞】(東風)

東から吹く風、ひがし風。

朝東風にとけて流れし九重の御溝のみづもまた氷りけり①
朝東風に乗りて来て低くまふ薦の地を這ふ影がしばらく寒し
朝東風のあらしになりてのどかなる春のけしきを吹たわめけり⑤
朝東風の吹きひるがへす朴の葉は葉おもてひろくすがしかりけり
朝東風のやむをうれしと思ふまに雨こぼれ来ぬ花のこずるに
朝東風は眼も澄みにけり腕挽ぎたてを板の間に匂ふ青梅の色③(角川文庫)

朝東風にいくつかあがる風ならむうなり支へてみな澄めるかも(私稿)
天つ空東風のまにまに富士が嶺へ寄りゆく雲は遊べることし④
雨晴れし空の朝東風早からし三船の山に今日は雲るす①(金月集)
青東風の御鈴の響となりけり下座の心咒のなほ勢ひつつ(多磨二)
青東風は御堂吹き抜くしばしばを胎蔵界曼荼羅の光りて揺れつつ
入り残る月ぞ寒けき沖津辺は東風立つらしき朝疊して
うちなびく川ぞひ柳あさ東風のふきのまにまに春やしるらん①
うつせみの世はかなしや風すらも西は東風にぞ吹きかはりぬる①
黄土地層づく大きさをもちていへりへ東風が西風を圧する時代③
思ひ子のこもれる遠の島こえて浪聞しづかに東風わたり来る
川のべに芽ぶける樹ありそよ吹く東風のまにまに木梢ゆれをり③
木のもととはそこわかねど朝東風のそよそ吹けば春めきにけり
草を吹く東風のそよぎにちろちろと舞ひ立つ声もねむき畫なり①
ここのへの大内山のあさ東風に青人草もはるを知るらん(新御歌会始)

東風吹きて緋桃の花もほころぶや蛙啼きたつ夜頃となれり①
東風ふきつるりつつ今日一日最上川に白き逆流たつも⑥
東風吹くや空にむらだつ白雲の今朝のしげきに雲雀なくなり(山桜の歌)
東風吹けば低くおほへる雲ふかし潮にさきだちて雨ふりきたる(新萬葉集六)
白みどり露の玉凝る笹の葉に朝は東風の吹き出しづけさ①(多磨二)

塚田青紀	宮柊二	與謝野晶子	中村憲吉	西村陽考	窪田空穂
明治天皇	増村王子	井上文雄	金子元臣	北原白秋	金子修
白井大翼	吉野秀雄	尾上柴舟	吉田恵弘	吉田恵弘	若山牧水
樋口一葉	與謝野禮巖	横田専一	長谷川濤涯	岡本無	太田水穂
八田知紀	野沢柿茸	斎藤茂吉	若山牧水	馬場静浪	久保井信夫

多摩川の水あたたかき朝東風(こち)に若きうぐひす岩づたひすも(新月)
隅田川浅瀬の土を掘る船に東風が持て来る橋のとよめき(五琴)
鱒漁の終りし網が干されゐて春光の東風寒き岬浜(毎日歌謡)
照り曇り定まらぬ秋を芒の穂きのふは西風けふは東風
どこやらから春が来さうな雪の後ですトロツコの土の東風です
土用東風に日和定まるつよき照りよき鹹(しほ)つきの昼開けにけり①
名細しき初風東風の向ふところ雲も開きて晴れゆきにけむ⑤(訪歌飛行機)
花散りて吹雪は靡く西風がとも東風かとおもふ知らぬ衝に⑨(現代短歌全集)
集
ひたひたと東風(こち)の押し来るあげ潮に磯藻のみどり色だちにけり
吹きちらふ物みな涼し朝東風や石塔のうへの藍微塵の花⑥
冬がれし門のやなぎもきのふけふ東風ふくかぜに萌えそめにけり①
ほのぼのと煙草の酔の身にはしみ東風寒きかも朝のなぎさに
美鶯(みどり)吹き篠吹く風の朝東風は目もすまに音のさやけさ
みやしろの松の竝木の初東風に雪山の空焼けにけるかな②
夕風は東風となりつつ磯山の松の梢に立つる音寒し(多摩)
与謝の海あさ東風なきてうらうらとくすみわたれり天の橋立
世にあれどなきが如くもこの人の消息はただ東風が北風か③
連翹(れんせう)が黄櫻(おうおう)展(の)べん季近みそを誘ふかに東風(こち)吹き起こる①
わたつみの浪のきざはし朝東風に紅き領布ふる帆の少女たち⑨
こーち【名詞】(「コーチ」)
①運動競技の技術を指導したり、教えたりすること。②又、①を行う人。
テニスなりあの横街にラグランの教授と記す立札のある②
こちこち【副詞】
①かたくなつて柔軟せるを感じられぬさま。凍つて非常にかたくなつているさま。
②緊張して動作がなめらかに出来ぬさま。③濃厚なさま。④堅いものどうしが軽く
触れ合う音。
かりそめに植ゑし姫する葉しげりて葉かげこちこち苔青みゆく②⑤
きさらぎの浜のこちこちの石垣に居倚りつつ見れば海面とほし④
栗まんじゅうの栗を前歯にこちこちと噛みつつ春の雨脚を見る④
見返ればその野の家はたそがれて厳こちこち雪とところどころ②⑤
こちこち【代名詞】(「此方此方」)
あちらここちら。あちこち。ほうほう。こち(此方)を重ねたもの。
秋霧のうへにあらはれこちこちの家の庭樹の黄葉したる見ゆ⑥
朝霧の消えのまにまにこちこちや覚め出でし花の野に飄る
伊那の野の陵根(はなね)に湧きてこちこちの草にわかるる五月の清水④
印旛沼日の春けば鳩のこゑこちこちに明る遠の靄より

北	太	窪	窪	窪	岡	岡	窪	朝	與	印	柳	落	出	小	北	若	樋	北	平	尾	島	荒	北	杉	藤	新	佐
原	田	田	田	田	本	本	田	吹	謝	田	原	合	口	田	原	山	口	原	野	山	木	木	原	浦	野	井	佐
白	水	空	空	空	か	か	空	磯	野	巨	白	直	舒	観	白	牧	一	白	俊	篤	赤	暢	白	翠	益	洸	信
秋	穂	穂	穂	穂	の	の	穂	子	寛	鳥	蓮	文	規	螢	秋	水	葉	秋	久	二	彦	夫	秋	子	雄	洸	網

甲斐信濃こちこちの国の相隣るさかひに立てりしほじり峠①
甲斐信濃の山とわが思ふ遠山は雪をかつぎてこちこちに立つ⑤
数きませしこちこちの宮野となりて蜘蛛心なし春の風ふく①
神さぶる森のこちこちみあかしの灯かげかすかに夜をともりたり⑩
刈跡はつむ雪早しこちこちを葎(わづ)づか白う見えまざりつつ
刈しほと麦は刈られしこちこちをこのごろしろし馬鈴薯の花⑥(現代短歌大系)
崩れたる門と築地とこちこちに残りて春の空曇りたり④
こちこち蛙なきつぐ声きこゆ御堂の前の池にのぞめば(小笹生)
こちこちに鴨の羽ばたく羽白し池の湛への青くしづけさ①
こちこちの木々を風ふき雨霽れのおかるき光照り足らひたり①
こちこちの花の下蔭明るきも暗きも吾に愛づらくして⑩
この岡のこちこちに立つや窓ひとつ持たる埴生のいにしへの小屋⑩
潮の路こちこちに光れ黒き洲のおほかたは洄れぬ葎(わづ)むらの外に
しみじみとつめたき朝はとく起きてこちこち畑に人は火を焚けり
すめろぎの国をよろしみなみ立の山のこちこちみ民かねほる②
草堤子らと歩いてこちこちに聴ける蛙か夜もすがら鳴く
たそがれとなりもてゆけばこちこちの山の狭間の雪光りたれ⑥
高畑(たかね)の道の築地(ついで)のこちこちのくえたるにそひて一人たどるも①
月のかさこちこちの島にかかりけり島の少女のひきか争ふ
墓むらや月の光のながるればこちこちの石の濡れてはろけき
花燃ゆる石楠木谿の朝日関けこちこちの岸に雉の呼ぶこゑ⑭
みちのくの南部の馬の木彫よりこちこちしきは誰の心ぞ
本栖(よきさき)の湖雲去来してみ冬なりこちこちに光るしろがねの面⑦
森と言へば叢立(よきさき)つ霧のこちこちに気高く厚く壘立てたる
夕かげの匂やかなる秋の霧早やこちこちの谷地をこめつつ⑩
夕沼のこちこちに浮く鳩の子は一羽は浮かず連れつつぞ鳴く
丘窪は刈田に泥ぢし稲株のさびさびにけりそのこちこちに
こちだ【名詞】(「近田」)
板わたす用水堀のこめか雨遠田(をちだこちだ)近田もとみに萌えつつ
近田には春蘭(はるらん)けがたの日の光ゆゆしかるべき何もあらぬに⑩
向つ尾の雨をよるこび蛙はきはきほひて鳴くも遠田こちだに
こちたかる【形容詞】
こちたかる魂などは無けれども夢見てありぬ春の野の雪②③
こちたかるひとのおほくにかかづらひなやみこそすれななとせやとせ
⑩

安	與	結	北	北	北	北	北	北	北	石	豊	窪	北	島	北	窪	窪	山	初	岡	窪	北	窪	太	若	武
江	謝	城	原	原	原	原	原	原	原	樽	島	田	原	木	原	田	田	口	井	田	原	原	田	田	山	島
不	野	哀	白	白	白	白	白	白	白	千	逃	空	赤	赤	白	空	空	不	し	空	白	白	水	水	羽	
空	晶	草	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	亦	水	穂	彦	彦	秋	穂	穂	二	枝	麓	秋	秋	穂	穂	衣	

二羽連れて小千鳥あそぶ秋もた渚の水に影のうつりつつ（多磨二）

こちなげに【形動詞】「骨無げに」

形容詞「こちなし」の語幹に接尾語「げ」の付いたもの。無骨である。無作法なさま。

丈高きあめりか婦人骨なげにのぞく御幕の中の嵯峨菊（素月集）

こちよう【名詞】「誇張」

①誇ること。②広まること、さかになること。（形動詞） 実際より大きさに言ったりする。又その様。

愛欲も既に虚しき齡ゆる食を樂しむといふは誇張か④

洗ひあげ出土の土偶女なり誇張ゆたかな双の乳垂りて三

いくばくか快きを誇張して歛べるいましも吾もあはれなりけり④

いくらかの誇張と吾をまもらむとする表現をとりゆく日記

今死にて心残りもなしといふ妻との対話誇張にあらず⑦

黄の果実画面に誇張されてをり高き湿度を部屋に感ずる（朱夏）

水害をかなり誇張して報告す税がいくらか減りはせぬかと⑤

それは誇張か誇張かあない五十九年一日も落着かず今日まで来た⑦

取りつくらふ隙も与へず迫り来し誇張されたる彼の反感②

なすべきをただになし来りたるのみといふこの言葉些の誇張なし②

日本にせめて絶望せざる間に死にたしと言わば誇張なるべし⑤

自らを語り得る者は幸なりおそろくはいくらかの誇張をまじへ①

病み臥して見舞ひうけたる友の前や誇張してわれは言ひしか⑥

流行をいたく罵りて言ひしこと老の意識に誇張したりしや⑥

こちよう【名詞】「小蝶・こてふ」

手のひらに白い小蝶をねむらせて何か不思議な談をし出す③

こちよう【名詞】「胡蝶・こてふ」

昆虫（蝶）の意称。

あけぼのをいつまでよそにねぶるらむこてふは花に月は霞に

あさみどり楓の木をば来てゆする夜明の風にまじれり胡蝶（夏より秋へ）

姉のせに眠れるちごの手にもたたくさのはなたばおふこてふかな①

あとになりさきになりして小草ふむ野路はこてふにともなはれつつ

一睡と題する室に人あらず胡蝶となりて花に飛ぶらん④

美しき翅をもちてあるからに、胡蝶は児呂に捕はれにけり①

扇ふたつ胡蝶のさまに夕闇の中をよりきぬ灯のあづま屋に⑤

黄金の箔を胡蝶の押しにきぬ盛りの春の丹朱の上に⑦

大御喪のしるしの胡蝶汝さへもしをるる見れば物おもふらし①

大空を雲ゆく見ではつばさ弱き胡蝶はわびぬ花かげにして（玉琴）

思出は胡蝶のごとくひとり寝のこよりそこに飛びめぐるかな②

吉田 恵弘	尾上 柴舟	松岡 貞総	五島 利茂	村田 明	井上 健太郎	松田 常憲	真鍋 美恵子	西田 嵐翠	矢代 東村	隅田 葉吉	矢代 東村	西田 嵐翠	葛原 嵐翠	松岡 貞総	松岡 貞総	前川 佐美雄	本居 豊顕	與謝野 晶子	丸岡 桂	千葉 胤明	與謝野 寛	福田 夕咲	與謝野 晶子	與謝野 晶子	武島 羽衣	笠原 君代子	矢沢 孝子
-------	-------	-------	-------	------	--------	-------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	-------	--------	------	-------	-------	-------	--------	--------	-------	--------	-------

軽きものわがぬけ髪と花めぐる胡蝶のはねと男ごころと①
草にとまる黒き胡蝶を見とめたり弁慶坊を思ひゆく道に③
暮れ早き秋の日ざしよ夕山を胡蝶たどたどし舞ひてゆきにけり（新萬葉集）
集四・多磨二
胡蝶さへとはじと思ふ花の中に小さき花をわれで見出でし（新萬葉集二）
胡蝶ともみえてふれかし春の雪あくがれて待つ人のおもひに⑦
咲きしよりはなれぬみれば常夏のあるじは胡蝶となるらむ①
覚すべき風もねむりて春の野の胡蝶の夢やはてなかるらむ①
下草は目立たぬぞよき翅ぬらす胡蝶安らふと見し著蛾の花②
深大寺春はもふかし咲きさかる庫裡の下見の胡蝶の群花①
すず菜さくなかの小道あとになりさきになりてもとぶ胡蝶かな
たぎちくだる流いよいよ音まさり道せばまりて胡蝶の花多し（秋の声）
手折りてし小萩の露やかかりけむ翅おもたげに胡蝶飛ぶなり①
玉すだれゆらぐともなき無き春風の行方を見せ舞ふ胡蝶かな①
散るは花飛ぶは胡蝶と知る我をなど狂へりと人笑ふらむ②（玉琴）
土ぼりかすかなるかも電車道すれすれに舞ふ黄色き胡蝶
ともすれば黄なる胡蝶の来てめぐるあわれこよひ熱を病むらし③
夏の野にこてふのまふとみえつるは咲くあぢさゐの花にぞありけり②
夏の夜に遊ぶこてふの羽袖をもぬひとめけりさきがにの糸②
など来ると胡蝶とらへてささやけばみそか心の花を吸はむと（常夏）
名も知らぬ霜がれをぐさ草の上に秋老い胡蝶さびしに舞ふ（玉琴）
奈良井川岸の木立に胡蝶とると行きし昔は夢のごとしも（テララギ故人）
野ばら咲く岸根離れて山川の荒瀬のうへを飛ぶ胡蝶かな
花ちらし夢をめぐりぬ七いろの大き翅負ふ胡蝶の少女⑨
花ちらす風にみだれて春の野にはねもやすめずとぶこてふかな①
花の恋胡蝶の恋のめまぐるし若き命の踊る皐月野①
花零りて胡蝶の舞も夢ならじ君は一国のけふより主ぞ
花もなき桜若葉に今日もまた胡蝶舞ひて来て人おもはしむ（玉琴）
春といふ時のうめるぞ花ぞのにうれひも知らずあそぶこてふは②
彼岸過ぎてまた霜しづる朝寒に蓄のかたき胡蝶を切らしむ①
一茎の紫苑の花にとび遊ぶ胡蝶のかずは五つなるらし⑥
ひとつ飛ぶ黄なる胡蝶を見しのにて井伊谷村は通りすぎたり④
人の世の夢野の春一時を胡蝶とともに舞はばや吾も（銀の簪）
ひねもすをあそびし胡蝶しら萩の花にやどりてくれぬ秋の日①
ひらひらと春の胡蝶の舞ひ来たりわれの心のうつつなきかも①

矢沢 孝子	四賀 光子	清水 乙女	大塚 楠緒子	太田 水穂	明治 天皇	武島 羽衣	川上 小夜子	中村 正爾	小出 繁	佐佐木 信綱	落合 直文	落合 直文	川田 順	松倉 米吉	尾上 柴舟	樋口 一葉	樋口 一葉	與謝野 晶子	岩上 勇子	望月 光	川田 順	與謝野 寛	昭憲 皇太后	関戸 信次	河野 寿賀子	佐藤 秀信	井上 通泰	荒木 暢夫	今井 邦子	川田 順	佐々木 信綱	三浦 守治	三ヶ島 霞子
-------	-------	-------	--------	-------	-------	-------	--------	-------	------	--------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	--------	-------	------	------	-------	--------	-------	--------	-------	-------	-------	-------	------	--------	-------	--------

ひらひらは胡蝶に似たるやさがたち月をめぐる夜の迷ひ雲③
昼明き谷の小徑にかがまりて冬の胡蝶を指触れむとす

ひるがほの花かとみしは草むらのしげみにとまるこてふなりけり②
頬白鳴くこのひと時をつくばひて胡蝶の行方目守りてをある③

まくらべの瓶にさしたるなでしこや夢の胡蝶のやどりなるらむ①
蜜柑山土のかわきに移りつつあそぶ胡蝶の影の小さき①

自らの心のごとくいちじろし金鑄色のさびしき胡蝶②
山百合を根ながら引きてかへる我が肩を去らぬかも白き胡蝶は④

夢に見し白き胡蝶の忘れ羽かあらず小百合のそのひと花か①
立春やわがよる窓にちひさなる胡蝶と見えて雪ふる日かな③

わか草に鏡を捨てて胡蝶追ふ狂女髪ながし野への春かぜ①
吾は知らじ黒髪に香にたより来る胡蝶をうちて死なしめたれど①

わりなくも君が御歌に秋瘦せてよわき胡蝶の羽もうらやみぬ
少女達胡蝶の舞の翅を負ふ魚見てこしと海を云ふかな②⑧

こちょうすみれ【名詞】〔胡蝶草〕

おもひ過して愕きしとき眼の前のこてふすみれは造花にありし
植物「三色堇」の異名

こちょうはな【名詞】〔胡蝶草・胡蝶花・こてふ花〕

枯葉もまじり池のほとりに乱れ伏す胡蝶草の霜葉よ冬日に光る
杉むらのを暗きに咲く胡蝶草の花はるけきことも思はしめつつ⑧

花過ぎし胡蝶花の青葉の照りなだる路に黎明の霧動きつつ⑧
不可思議のぬるる炎のくれなゐをみな吐きてゐる赤花胡蝶のはな⑪

列より遅れ来し生徒の待つ胡蝶草はいたはれつつ既にしほめり①
流・現代短歌集

こちゅうらん【名詞】〔胡蝶蘭・こてふらん〕

ラン科の多年草。フィリッピン、台湾原産で観賞用に温室などで栽培される。気
生ランで、球茎がない。葉は長さ約三〇センチの楕円形、花茎は長さ約六〇―九
〇センチで弓状に湾曲し、径六センチ位の花を穂状に多数つける。花は純白で、
舌弁に黄・赤色の条線や斑点がある。

いく年か手しほにかけし胡蝶蘭をたはやすく貰はれてのちのくやしき
①

胡蝶蘭風にゆるる野のはてに血を吸ふ鬼の棲むといふ山①
胡蝶蘭に乾く空気のけうとく何か造り花の感じかも③

薄々と月夜の露の凝れよとぞ花芽だつ胡蝶蘭を庭石に据う③
（新萬葉集七）

こちら【代名詞】〔此方〕

自分の側にあると見なすものを指し示す時の方向。①他称、話し手側の方向、場
所などを指し示す近称。このかた、このお宅。②自称、話し手自身を指す。わた
くし、自分、又われわれ。③手前の方に当る側。（イ）この場所、ここ。（ロ）

大田 穂	川田 順	明治 天	中河 庭	昭憲 皇	中村 正	與謝 野	矢沢 孝	茅野 雅	太田 水	落合 直	矢沢 孝	茅野 雅	與謝 野	矢沢 孝	宇都 野	矢沢 孝	吉植 亮	若林 牧	吉植 亮	谷 鼎	加納 小	関戸 信	吉田 正	平井 二
水	穂	皇	柯	太	爾	子	子	子	穂	文	子	子	子	子	研	子	亮	春	亮	鼎	郭	次	俊	郎

「あちら」に対しわが国。「こちら」「あちら」に対し自分の居る時話し手に近
いものをさす。

あかあかと向うの山は日はあたりこちらの路は枯木がさわぐ④
朝日てる山のしただきの旧火口こちらに向きて大きく開く

浅水をふみて近づく鶴細しこちら向きたる頭丹しも
朝焼けの空を背景に向日葵の黄の花はこちらむきある⑤

あし引の山のさまざまありと云へどこちに向いたる山は吾山①
あちむきに咲きたる茄子の花見ればこちらに向けと言はまくほしも①

あらはなる駝鳥のくびのいただきに眼がありこちら見てゐたりけり①
ある時は誰知るまいと思ひのほか人が山から此方向いてゐる②

石垣の隙間隙間の黒い孔雨にだまつてこちら見てゐる③
伊豆晴れぬ此方相模の山々の殊にあかるう海にうつりぬ①

稲掛のかげに此方向きたれば野砲と思ふ荷車の轍も④
稲架稲は野分に飛びてこちら田も向ふ田もあらず波にただよふ⑤

岩風呂にこちら向きたるひとの顔湯けむりの中におぼめきてみゆ⑥
以後

いやはるか君の抜手に遠ざかり此方のわれをさびしがらすも
岩尾根の裂けて壁立つ此方より彼方の岩へ踏み越えむとす③

項伏してあげし我が眼にあなたふと書き写真此方見ませり
大きな角をこちらへ向けし鹿の顔生意氣に見えて可愛ゆかりけり②

面白さうに手を高くふる囚人のこちらをみて遂に笑った。③
親の顔見むとわが子のいきばりて来らむその顔こちらも待たゆ④

回向院鼠小僧の墓のあるあたりは霽れてこちら雨降る⑦
かがやかに光し散ればいただきの木々の此方に月出づること⑫

容よく裸木にとまり此方向く野鳥は鋭き眼つきしてをり①
片寄りにこちらの欄干に寄りつどひ阿武鬼観音が見ゆとさざめく

門の前に立つは吾家の子隣家の子あそびをやめてこちら向きたる①
彼方かと見れば此方の峯に鳴る雷雨凄まじ赤城連山⑤

枯芝の照る彼方水仙の園展け此方紅葉のかざす苔地あり⑤
枯山の小松のひまゆトチカのいくつかの目こちら向きたる⑥

樹に群るる雀おのおの主張あるかあちらむきこちらむきこゑ騒ぎたつ
①

機を降りてこちらに歩み来る人の事もなかりし空はみなくに②
くだらむとしてかへりみぬ一山の羅漢ことごとくこちら向くがに⑧

首うごくこけしの頭無理やりにこちらへ向けて味気なき日よ②
首伸ばし白鷺三羽一やうにこちら見てをりこの偶然を①

西村 陽	川田 順	松村 英	下村 照	小杉 放	岡野 直	中村 正	北原 白	塚田 菁	近藤 元	與謝 野	吉植 庄	橋田 東	早川 玲	植松 寿	岡野 直	森園 天	矢代 東	岡井 勇	吉井 勇	尾上 柴	山田 百	川田 順	奥貫 信	金子 榮	吉野 秀	辻野 昭	荒木 暢	森高 徳	吉井 保	塩川 三	鵜木 保
吉	順	一	路	庵	七	爾	秋	紀	元	寛	亮	声	子	樹	七	郎	村	麓	勇	舟	子	順	盈	吉	雄	昭	夫	次郎	勇	保子	保

暮れ寒き水におりゐる鴨一つその張り胸をこちらむけ来よ⑧
こちら見てはなひる馬の長き面青き草の実こだつき居る（新萬葉集二）
こちら向き秋の畠にたつ女あはれに見つつ遠よそに過ぐ
こちら向きしばしうごかぬ額白の青葦のうへの長き顔あはれ②
こちら向きひた走り来る豚の仔の耳ひらひらと愛憐しきるかも⑤
此方向く仔馬は愛し母馬の莎草食む傍ゆ眼をあげてゐて
こちら向けいなこちら向けと左右より鼻引張りて寝せぬ我子ら③
「此方への付札無之ながめ入申候」と君が鮎酢の請状がありて④
この度はこちらも覚悟を新にし食ふなら食へと数多く待つ⑧
この汽船の巨き煙突けぶなびき渡島の子らは此方見てあらむ
子を抱いて丁度おもてに出た妻がこちらを見てる微笑してゐる（新萬葉集）
五分刈りの小坊主となりし子が名をば呼びていくたびも此方むかしむ
先行きて銃とる獵夫の身構へのこちら向き居る銃口はあり
サロンの窓近くゆく外人が照りかへす光の中よりこちら向きたり①
しかすがに女は飛びも越えかねてしばし此方の岸を歩ゆめり③
しづかにこちらむきたる乳牛のホルスタインは棟の下に
島の子が何かいひをり舟こぎてこちらに来つつ何か言ひをり（地蔵以後）
写真には煙草煙らず伏せたまふ御眼は遂にこちら見まさぬ⑦
初夏の雲の此方の入海に星のしるしの白き船浮く（トラビスト歌集）
知らぬまに生けられてありし鉄砲百合藍吐きてみなこちら向きたる③
（近代短歌大系）
水族館の蒼きまひるま裏側をこちらに見せてはりつける蛸③
すばつと態度をかへてこちらの味方だとしやあしやあ酒を飲んでゐる
②
損せしはこちらなればとものごとに諦めよくて妻の働く⑤
先生の顔をにらむと先生もこちらの方をぎらりとにらむ（新萬葉集）
たいくつだ 遊びに行かう、だが母がこちらを見つつにらんでゐま
す。（新萬葉集）
竹橋付近の彼方此方に桜咲き心悲しもよ春の御濠は①
ただひとりこちらを向いてゐたれども人が来るなり人を使へば①
乳のむをやめてときどきこちらむき今朝は僕にもよく笑ふ子だ（朝霧）
つきぬけて来りしゆふだち大空に壁なしてこちらの空だけが夕日④
築山にこちら向く子の前髪は光る青葉の風にみだれつ（新萬葉集三）
堤防のこちら枝篠架たくましくならぶ塩浜今は流さぬ
遠くにもえごならむ花のさく樹があり犬あらはれてこちらには来ず
訥朴な無口な下男だ 平作だ こちらから何か話したくなる③

尾山 篤二郎	梅田 正治	岡田 稻里	橋田 東声	川田 順	北原 白秋	大悟法 利雄	松田 常憲	土屋 文明	北原 白秋	奥貫 信盈	中河 幹子	堀内 通孝	中原 綾子	水町 京子	橋田 東声	若林 牧春	三木 羅風	大悟法 利雄	久方 寿満子	原 三郎	長谷川 銀作	対馬 由美子	長沢 良美	鈴木 金二	角 鷗東	奥貫 信盈	吉植 庄亮	栗林 久司	荒木 暢夫	遠山 光栄	矢代 東村
--------	-------	-------	-------	------	-------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	--------	------	--------	--------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

隣枯れこちらいや茂る庭木の類目には見えざる地下の戦（実客思）
泥沼の枯蘆の此方涉りつつ白さぎの群遠ざきゆくも①
泣き濡れし頬をこちらむけ双手出し抱けといふなチエ子はよき児①
握りつる鉄の大輪をふと放つ刹那身はあり此方の岩に⑫
桔槔に大きく羽ばたきとまりたる鳶真顔してこちら向きたる③
浜なすのさける砂丘をともしみか柵によりて馬の皆此方見る
万歳に強ひて笑まむと一人の兵引き攀る頬をこちら向けたり（多磨二）
光りつつ此方へ靡く竹群の返さぬひまを吾は視てをり（多磨二）
引堀に手綱うちふせことと柵をうつに鴨の此方向き来る⑩
ひしやげたる軍帽の下に吾子の顔こちらを向きて幼く笑めり②
ひそまりて物書くゆゑにあちらこちらはなひるきこゆ戸外はこがらし
①
ひたすらと此方たのめて生きにける人死ににけり死にぬ埒もなく⑩
日だまりにこちらを向きて白菊をまぶしがりゐる嬌のふけて見ゆ（多磨）
三
ひたよりに此方の岸に沿うてくだる黒龍江艦隊の砲艦ひとつ⑬
人混みにまじりて電車降り給ふ先生をはや此方より認む②
一谷をへだてて日あたる向うの崖こちらの崖と伝らいます（新萬葉集二）
一葉のみ此方へしをれし草の葉の昏れのこりゐる怪しき白さ①（角川文庫）
一人の反対が却つて効果的にこちらの主張はつきりする。⑦
日の入りし地平のはるか此方にて稚木の林くれなる燃やす②
陽の射すと光は見えてゐながらにこちら山くぼ鳥の音寒し（新萬葉集二）
向日葵のこちらむきたる同じころ今日もかの家見かへりて行く①
広庭の朝光ふかし庭つ鳥あちらこちらにうづくまりゐる
ふなべりにひたとい寄りて釣れるから小舟はこちらに傾いてゐる
舟停めて人は潤間に遊ぶらし顔こちら向けのどに坐れり
書よむと机に向ひ片隅の花瓶の花をこちらへむけぬ
星空の星の国より亡き妹がじつとこちらを覗てもおるらし③
舗道より馬糞拾ひゆきし人路次に入るときこちらを向きぬ③
ほの白く栗の花ちる木下みちこちらむきたる藁のいかしさ（多磨二）
ぼつとつと崖はなにかけ出でし一人の子いきはずませてこちら見てゐる①
マスコット長き足垂れこちら向く凍れるバスの窓背景に③
真黒によごれし足裏をこちら向けいたなく昼寝をするおのが妻⑤
蜜柑とる鉄の音のきこえつつみどり葉はゆるるあちらこちらに③

相良 義重	金子 信三郎	小名木 綱夫	尾上 柴舟	中沢 庭柯	石樽 千亦	吹田 宏二	島内 八郎	北原 白秋	山田 百合子	橋田 東声	北原 白秋	持田 勝穂	川田 順	塚田 菁紀	浅利 良道	宮 柊二	矢代 東村	相良 義重	生田 蝶介	岡田 稻里	川田 順	高木 一夫	清水 恒子	岡本 大無	長谷川 銀作	片岡 恒信	角 鷗東	相良 義重	西田 嵐翠	木下 立安
-------	--------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	-------	-------	-------	------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------	--------	-------	------	-------	-------	-------